
なりゆき（無理やり？）賢者

T_Y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なりゆき（無理やり？） 賢者

【Nコード】

N1386J

【作者名】

T
|
Y

【あらすじ】

いつもの様に学校から帰宅しゲームをしていたところ行き成り白い光が輝き、目を開けるとゲームの中で女賢者になっていた・・・

第一話 僕が賢者？（前書き）

この作品には多少、ドラクエ？のエンディングに関する事柄が含まれています

これからドラクエ？をプレイする方、もしくはプレイされている方は御遠慮ください

第一話 僕が賢者？

学校からの帰り道友人との会話にて……

「なあ麗雄、帰りにゲーセンに寄らね？」

「いや今日は家でゲームをするよ」

「今日は……って毎日じゃねえか！」

「じゃあ今日もゲームをするよ」

「言い直すな！！ よくも飽きもせず同じゲームをプレイできるものだ……」

「新しいゲームを買えるほどお小遣い貰ってないから……」

ここで自己紹介

主人公は綺堂^{キドウ}麗雄^{レイオ} 高校3年生である。

麗雄は2年前に買ってもらったドラクエ？を未だにプレイし続けている。

しかもエンディングも10回以上は見ている。

そして今回も既に大魔王ゾーマの手前まで進んできている状態である。

ここでパーティーの紹介

まず勇者 性別は女 名前はラムダ レベルは95

次に戦士 性別は女 名前はシータ レベルは89

次は武道家 性別は女 名前はミュー レベルは93

最後に賢者 性別は女 名前はエル レベルは99

パーティー全員が女性という麗雄の趣味なキャラ設定になっている

そしてゲームに戻る

ゾーマの前に最後に立っていたバラモスゾンビを倒した時、異変は起こった……

倒した直後、テレビ画面は白く光り麗雄の意識は途切れた目が醒めた時、目の前にゾーマの姿が……

テレビの画面越しではなく本当に目の前に大魔王ゾーマが……

「ここは何処だ？ 僕は何故こんなところにいるんだ？」

「どうしたエル？ 何を訳の分からない事を言っている？」

目の前に居る女戦士が自分に問いかけている。

「エル?? 僕がエル？」

訳が分からず混乱していると……

「お前以外に何処にエルが居るんだ!!」

と、女勇者・女武道家が声を荒げて身体を揺さぶってくる

訳が分からないが、此処は一つ……

「とりあえず……目の前に居るゾーマをさっさと倒してしまおう。」

平均レベル90以上のパーティーにはゾーマといえどもザコキャラでしかなく、ほぼ瞬殺で終わった。

ゾーマを倒した直後、地震がおきて床が崩れパーティーは落下したゲームの通りなら直ぐに何処かのダンジョンに居るはずなのだが……

落下した先は広い平原の真ん中……

「なぜ城の中から落下して平原に居るのか？」

上を見ても青い空が広がるだけ……

自分の身体を見てみるとドラクエの女賢者の姿・・・

ここは何処だああああ

そして僕はいつたい何々だああああ

第一話 僕が賢者？（後書き）

初投稿です

宜しく願います

読みづらい箇所が多々あるかもしれませんが文章能力がないため勘弁してください

読者の皆様方からのご意見・感想・批評など・・・

遠慮なくお申し付けください

お待ちしております

第二話 能力の確認（前書き）

ゆっくりと更新していくつもりなので、これからも宜しくおねがい
します

第二話 能力の確認

さて前回に続き未だに平原の真ん中にいる女賢者

ここに居る理由だが、能力の確認を試してみようと思う

まずは魔法

賢者とは魔法使いと僧侶の魔法全てを使いこなす事ができる存在

「とりあえず一通り魔法を試したが問題なく使えそうだ・・・」

ふと思い辺りを見回すと一部は凍り、一部は消し炭状態、一部はクレーターになっている

「おもいつきり環境破壊をしてしまった・・・」

誰かに見つかる前にこの場から離れようと思ったのだが既に遅かったらしく近くの街道に騎士らしい人影が20人程、警戒しながら見つめている

「まあこの現状をみれば怖くて近寄れないというところか・・・」

そう思っていると一人だけやたら重装備の騎士が警戒しながら近寄ってきた

「ここに凶暴な魔獣が現れたと騎士団に通報があり遣って来たのだが、君は此处で何をしている？ 早く立ち去らねば魔獣に襲われるぞ」

「あの・・・あなたは？」

「申し遅れました・・・私は近衛騎士団第八部隊長 シグマ＝ライオネルといたします」

「私はエルと申します・・・」

「ではエル殿、危険なため私共の陣営までさがっ
『グオオオオオオ
ー』な、なんだ!？」

目の前から10メートルほどの場所に3メートル近い巨体の頭に角が生えた熊が現れた。

「間に合わなかったか・・・君は逃げてくれアレは私が食い止める
!!!」

「大丈夫ですよ・・・慣れてますから・・・」

そう言って手を魔獣の方へ向ける

「な、なにを言って・・・」

そして呪文を紡ぐ

「イオラ!!!」

呪文が魔獣に命中した直後、熊と思われる巨体が跡形も無いほどバラバラに吹き飛んだ。

ふと隣に居る騎士を見ると・・・

目が点になり魔獣が居た場所をみて固まっている。

見回してみると他の騎士たちも呆然となり見ている。

「どうしました? だいじょうぶですか?」

と問いかけると我に返ったようで・・・

「君は本当にいつたい何者だ!! 何処の軍に所属している!!」
「いえ・・・何処にも所属しては居ません。フリー状態です。」
「???ふりーとは何だ?」

英語は通用しないのか・・・

「えっと・・・自由な存在で・・・軍には所属していない人間ということです」

「そのような力を持ちながら何処にも所属していないとは・・・すまないが・・・これから城まで同行してもらえないか?」

「どうしてですか?」

「あの魔獣をいとも簡単に倒してしまった者に他国の軍に所属されると我が軍は勝ち目がなくなる・・・どうだろう? 我が軍・・・いや国に使えて見ないか?」

どうしよう・・・まあ行く当てもないし、この隊長さんも悪い人には見えないし大丈夫だよな

「わかりました。御一緒にします。」

「よかった・・・ではエル殿、あちらの馬車にお乗りください」

そうして・・・凄く豪華な馬車に手を引かれ乗り込むこととなる・・・

「ここから王都までは約3日の予定です。少し窮屈かもしれませんが御容赦願います」

こうして女賢者エルの旅が始まった。

第二話 能力の確認（後書き）

第二話を早くも更新しました

ドラクエでのレベル99の賢者なので最強主人公となっています
読みづらいところもあると思いますが御容赦ください

ご意見・感想・批評 お待ちしています。

第三話 王都ラグキユール

重騎士隊隊長のシグマの勧めで馬車に乗り3日後、王都についた

王都には辿り着いたが王への謁見には時間がかかるとシグマに言われ客室で待つ事に。

その間、メイドらしき女性から紅茶を薦められた。みたないろ

客室にて連絡が来るまで出された紅茶を飲みながら窓の外を見てみるとメイドが誰かを制止する声とともに勢い良く扉が開いた。

何事かと思い見てみると其処には黒いマントを羽織り杖を持った女性立っていた。

「あなたがシグマが連れてきた見たことも無い魔法を使うエル殿ね」「はい・・・私がエルですが、あなたは？」

「あ、私は近衛騎士隊4番隊隊長であり魔術士のライラ＝マクシミリアンよ。よろしく」

早速だけど騎士隊訓練所まで一緒に来て魔法を見せて!!」

「よろしく願います・・・ライラさん」

「敬語なんて使わなくて良いから・・・ライラって呼び捨てでいいわよ」

「わかりま・・・わかった。よろしくライラ 私も呼び捨てでいいよ」

「ありがとうエル。じゃあ一緒にきて」

私は国王に謁見するために此処にいるのにと思しながら部屋の隅にいるメイドに目配せをすると・・・

「エル様・・・謁見するにはあと半日程のお時間が掛かりますので

其れまでの間、城内を見てはいかがでしょうか？」

「部外者が勝手に城内を見て周っても問題が無いんでしょうか？」
とメイドやライラに問いかけると・・・重要な場所には騎士が立っ
ていて入れないので問題が無いとのこと・・・

「じゃあ行ってきます」とメイドに手を振って答える

そしてライラに連れて来られた場所は騎士たちの訓練場。

内部はかなり広く、見回していると王都に連れて来てくれたシグマ
の姿も目に入る。

シグマに聞くと私が倒した魔獣はグロリスというらしい・・・

魔獣グロリスを退治するために騎士隊20人をシグマが連れて行っ
たが、たった一人の女性にあっけなく倒されたという事を訓練場で
話したらライラの顔色が変わったらしい。

そこでライラから「魔法を見せて」とせがまれた。

訓練場にある案山子かかしに「魔法を打ってくれ」と言われたが此処で魔
獣を跡形も無く吹き飛ばした魔法を使うのは拙いのではないかと思
い爆発系呪文の低級呪文“イオ”を使うことにした。

イオが当たった案山子は粉々に吹き飛び、城の壁にまで亀裂が入る
代物だった。

振り返りライラとシグマを見るとグロリスを倒した時のように呆然
となっていた。

ここで少し考える・・・

イオで案山子を粉々にする威力・・・
イオラで魔獣グロリスを跡形も残らないほどにする威力・・・
では爆発系最強呪文であるイオナズンを使った場合はどうなるのだ
ろうか？

と怖い想像をしていると我に返ったライラから

「魔法騎士隊長にならない？」と・・・

「ライラが魔法騎士隊長じゃなかったっけ？」

「あんな威力の魔法を見せられたら隊長としての自信がなくなった。
ということ代わりに隊長になって！ 私は副隊長になるから・・・」

「でも行き成り軍人でもない私が隊長になると他の隊員から苦情が
出るんじゃない？」

そう思いながら周りにいる魔術師をみると皆、表情が固まっていた・・・。

「じゃあ王様に謁見したあと考えておきます・・・」

と答えて暫く《しばらく》するとメイドから「謁見の準備が整いました」と呼び出しが。

メイドに玉座の間の扉まで連れてきてもらい扉の前にいた騎士に玉座まで案内して貰った

「私がラグキュール国王のマリア＝ラグキュールです」

てつきり国王＝男性と思い込んでいたが女王様でした・・・。

「エルと申します。」

旅の途中で魔獣に遭遇し退治したところシグマ殿に招かれました。

「そんなに硬くならなくても良いのですよ。顔を上げてください。」
と女王様

顔を上げると目の前に女王様とその右隣に魔術士隊隊長のライラが
．．．
そして左隣にはシグマが見える

「ライラとシグマから魔法に関する報告を受けました。」

ライラから魔術士隊の隊長としてエル殿が欲しいとの要望が届き
ました」

「ライラ殿．．．」ライラを見ると笑顔で手を振ってくる。

「わかりました．．．魔術士隊隊長をお受けいたします。」

こうして客人として王都を訪れたはずが幸か不幸か魔術士隊の隊長
になってしまった。

ついこの前までただの学生だったのに．．．

第三話 王都ラグキユール（後書き）

第三話更新しました。

登場人物の名前を必死に考えている最中です。

今のところ・・・

ライラ＝マクシミリアン

シグマ＝ライオネル

マリア＝ラグキユール

この3人の名前と魔獣の名前しか考えてないです

読んでくれている読者の方々・お気に入り登録された方々ありがとうございます。
うございます。

ご意見・感想・批評をおまちしています

第四話 魔法剣（前書き）

短時間の間に4話まで出す事ができました

3話目終了の時点でPVが1000を突破しました

これからもよろしく願いいたします。

第四話 魔法剣

前回の女王様への謁見時に無事(?)魔法騎士隊隊長になったエル。

自分が隊長になったことで副隊長になったライラとともに宿舍へ向かっていた。

「エル、基本的に隊長と副隊長は性別が違わない限り同室になるからこれからもよろしく」

「よろしくライラ。でも女性と同室か・・・緊張するなあ。」

「エルも女性でしょうが！それとも、そういう趣味の人？」

一瞬どう意味が分からなかったが顔を赤くして訂正する。

「ちっ違う違う違ううううう・・・」

涙目でライラを見ると「冗談よ」と笑いながら答えてくれた・・・でも身体は女性だけど心は男だし・・・緊張はするかも・・・

同室という事でもう一つ気になっていることをライラに聞いてみる事にした。

「ライラ、部屋が同室って事は私が入隊する前にいた副隊長は？」

「ああ、魔術士隊の副隊長は最初からいなかったから大丈夫よ。」

「最初から副隊長が不在？」

「能力が低い隊員ばかりだったから副隊長にしなかったの」

「ところで明日だけこの前の訓練場でエルの魔力値の測定をするから・・・」

そついい残し、ライラは逸早く就寝した

翌日、訓練場にてライラが水晶球を片手に現れた

「じゃあ昨日、部屋で言つたとおり魔力値の測定をするわね

ちなみに普通の魔術士隊員の魔力値は1000前後、私は5000前後あるから……。」

「自信がないけど……やってみる。どうすれば良いの？」

「水晶の上に手を置いて。あとは気分を落ち着かせて緊張せずに……。」

言われたとおり水晶に手を置き、深呼吸して待つ。

周りから驚嘆する声が聞こえてきたのでライラにはなしかけると……。

「エルの魔力値だけど……あなたいったい何者？」

「?どうしたのライラ……?」

「魔力値185万5000って数値が水晶に表示されているんだけど……。」

「ありえない数値なのかな? ライラ？」

「ありえないどころか……伝説の大賢者並みの数値なんだけど……。」

ここで「私は賢者です」と言ってしまうと更に混乱が酷くなるのが予想できたためあえて言わなかった。

「ねえライラちょっと魔法の応用技を試したいんだけど、この訓練場を使つても良い？」

「応用技? なにするの?」

「武器である剣に魔力を付加させて使えるかどうか試したいの……

「・・・だめ？」

「いいけど・・・エルって剣も使えるの？ 魔術士なのに・・・？」
「うん」

ライラの許可を貰い改めて魔法剣を試してみる事にした。

近くのシグマの隊に事情を話し、鉄の剣を10本ほど譲ってもらう事にした。

シグマの隊も何をするのか気になるらしく観客の一部となっている。

「まずは炎の剣を作ってみよう」

右手に鉄の剣を持った状態で右手でメラミを唱えた。

一瞬、うまく行ったと思ったのだが鉄の剣は音もなく粉々に砕け散った。

「駄目だったか・・・それじゃあ・・・」

と首を傾げながら先ほどと同じ様に右手に鉄の剣を持ち右手でメラ（火炎系低級呪文）と唱える

「今度はうまく行った。 フレイムタン（炎の剣）の出来上がりっ
と。」

同じ要領でヒヤド（氷結系低級呪文）を唱えアイスブランド（氷の剣）を作り上げた。

イオ（爆発系低級呪文）、バギ（疾風系低級呪文）を試したが剣にはならなかった。

・ 試しにシグマに作った剣で案山子に切りかかってもらったところ・

フレームタンは切った直後、案山子が燃え上がり消し炭状態に。
アイスブランドも切りつけた後、氷結しまたもや粉々に砕け散った。

この2本を作るために鉄の剣8本が犠牲になり案山子が2体砕け散るといふ結果に終わったため、この2本以外は作らなかつた。

ちなみにフレームタンはシグマがアイスブランドはシグマ隊の副隊長が使うこととなつた

第四話 魔法剣（後書き）

最後に錬金術みたいな事を入れて見ました

注）ドラゴンクエスト？には錬金術は存在しません。

ドラクエ8に錬金釜というものがあつたような・・・

作者のオリジナルとして取り入れてみました。

御意見・御感想などで取り入れて欲しい術にリクエストがあれば言
って下さい。

どんどん追加していく予定です

第五話 騎士団の仕事（前書き）

無事に第五話を出すことが出来ました

新たに2人の隊長が登場します

第五話 騎士団の仕事

騎士団に入隊してから気になっていた事をライラ・シグマに聞いてみる事にした。

「ねえライラ、騎士団って普段はどんな仕事をしてるの？ もしかして近隣諸国との戦争とか？」

「ううん、ここ10数年は戦争らしい戦争はしてないわ。 騎士団の仕事は大抵、村や町を襲う魔獣の駆除が殆んどよ」

「この前も魔獣グロリスが暴れていると報告がありシグマ隊の重騎士隊20人で倒しに行ったのに、エルが一人で倒してしまっただんじやないか・・・」

もしかして魔獣グロリスって強いモンスターだったのかな・・・
そう思いシグマに聞いてみると騎士団20人で困って、やっと互角だということ・・・。

「そういえばライラ、回復魔法って魔術士隊でも使えるの？」

「簡単な傷を治すだけの魔法なら使えるけど重傷の場合は城内にいる医療班に診て貰わないと。 大賢者様の魔法の中に瀕死の重傷でも一瞬で治す魔法があると聞いた事があるわ」

そう訓練所でライラと話していると・・・2人の見たことの無い騎士が話しかけてきた。

「君が新しく魔術士隊隊長になったエルかい？ はじめまして近衛第5部隊の竜騎士隊長ケイン」シュナイゼルだ。 よろしく頼む」

「よろしくお願ひしますケインさん。 新人の隊長なので御迷惑をかけないよう頑張ります。」

「同じ隊長同士なんだから敬語はいらない。呼び捨てでかまわないよエル」

「わかり・・・わかったケイン！ これからもよろしく」

「うんうん・・・。」

「いい雰囲気のところ悪いが・・・俺の事を無視するなケイン！！」

「あの・・・あなたは？」

「俺は近衛第6部隊の騎馬隊隊長ガリアマスターだ。」

俺の事も敬語は使わなくても良いし名前を呼び捨てにしても構わない。」

「よろしくガリア。ところで・・・どうして女性なのに男みたいな喋り方してるの？」

「まあ・・・その、なんだ・・・女言葉は恥ずかしいんだ・・・。」

そう言って逃げるようにケインと一緒に立ち去ってしまった・・・

「ねえライラ、私と初めて会ったときに『見たことの無い魔法を使う』と言ってたけどライラの魔法を見せて。」

「エルみたいに凄くはないけど・・・あの案山子に撃ってみるわね」

そういうとライラは案山子に向かって右腕を伸ばし指を誰かに指を指すように構える。

「フレイムアロー！！」そう言うと火の矢が案山子に突き刺さった。

私の唱える魔法とは違い、案山子が砕け散る事はなかった・・・。

「他にもファイアーボールとかアイスニードル、サンダーボルトがあるけど案山子を壊すような威力の魔法はないわよ」

「ライラは2種類の違う属性魔法を同時に唱える事ができる？」

「できるわけがないよ。エルもしかしてできるの？」

「まだ魔法としては習得してないんだけど……練習中って
いうところかな。」

「途中経過でも良いから見せてくれない？ エル。」

漫画ダイの大冒険にてポップが習得した極大消滅呪文メドローアを
習得できないかと試しているのだが炎と氷の同時詠唱は出来るが弓
矢の形にはまだ形づくれていない。

「まだこんな状況なんだけど……」と言い左手でヒヤド、右手で
メラを唱える。

見せた直後、魔術士隊の隊員もライラも目が点になり呆然とその場
に立ち竦んでいた。

第五話 騎士団の仕事（後書き）

お気に入り登録されている読者の方々ありがとうございます。

第一話を投稿してから24時間経過したところ

PV2700アクセス ユニークは520人に達しました

これからも【なりゆき（無理やり？）賢者】をよろしくお願いいたします

ご感想・ご意見・批評をおまちしています

お気軽に小説の内容としてのリクエストもお待ちしています。

第六話 魔物退治にて（前書き）

PV4000突破しました

ユニークも620人になりました。

第六話 魔物退治にて

訓練所にていつもの様にライラや隊員たちと会話していると伝令が飛び込んできた

「魔術士隊隊長のエラ殿はおられますか？」

「私がエラですが………何用でしょうか？」

「女王様がお呼びです。至急、玉座の間までお越しください。」

「わかりました。すぐ行きます。」

ライラ、出撃かもしれないから準備をして待機していて

そう言つて訓練所をあとにする

玉座の間へ行つてみると女王様から

「城から2日のところで獣人が暴れているとの報告がありました。」

至急、隊を編成し討伐してください。」

初任務となりますが気をつけて……。」

そして再び訓練所にて……

「ライラ、獣人の討伐任務だったわ。隊員の準備はどう？」

「獣人の規模が分からないから総勢20人に出撃準備をさせているわ」

「移動手段は？」

「6人乗りの馬車を4台で行こうと思うのだけれど……？」

「わかった。20人も要らないとは思うけど念のために連れて行きましょつか」

そうして馬車に揺られ続ける事2日間、やっと目的地に辿り着いて

みると・・・

上半身が狼で下半身が人間なのが10体
3メートル近い巨体の牛のような獣人が15体、平原に集まっていた。

「ねえライラあの獣人は？」

「大きいのがミノタウロスで、人間みたいなのがワーウルフよ」

「魔法耐性は？」

「ワーウルフは比較的簡単に倒せるけど、ミノタウロスは手ごわいわよ」

「わかった。ちょっと強めの魔法を撃つから隊員たちを下がらせて」

そうライラに伝えると魔法を撃つための準備を整え始めた。

「エル、隊員は退避済みよ。いつでもいいわよ」

「わかった。いくよ!!」

掌を獣人の方へ向けると「バギクロス（疾風系上級呪文）!!」と唱えた

詠唱と同時に現れた風の刃が獣人たちの五体を切り刻む

この攻撃により獣人が全滅したと思われたがミノタウロス1体とワーウルフが3体襲い掛かってきた。

なんとかライラ達と協力し倒したのだが隊員達数名に重軽傷者をだしてしまった・・・。

戦い終わって・・・

「エル隊長、戦後報告いたします

軽傷者5名、重傷者1名の確認ができております。死亡者はいません。

うち軽傷者5名はライラ副隊長の回復魔法で治療しています
が。。。。」

「どうしたの？」

「重傷者1名は城まではもたないとのことです」

「すぐに重傷者のところへ案内して。いそいで!!」

「は、はい。こちらです!!」

さて医療テントに来たものの重傷者に対して強力な回復魔法を使う
と私が賢者だとばれてしまう。。。。
しかし隊員を見捨てる事などできはしない。。。。

「すぐに直してあげるからね。もうちょっと我慢してね」

そう言い患部に手を伸ばす

「ベホマ!!（上級回復呪文）」

そう詠唱すると見る見る傷が塞がり、傷がなくなってしまふ。。。
隊員は血液不足により気を失ったままだが死ぬ事はないだろう。。。
。

あまりに集中していたため背後にライラがいることに全く気づかなか
った。

「エ・エル?。。。。そ・その呪文は大賢者様と同じ。。。。
。。。」

「黙っていてゴメンねライラ。。私は前にいた場所で賢者と呼ば
れていたの。。。」

周りを見ると他の隊員達からも。。「隊長が賢者様?」とか「大賢
者様!!?」とか騒ぎになっている

「やっぱり大騒ぎになっちゃったか。。。」

城に帰る頃には静かになっていると思っていたエルだったが・・・
城に帰還後、国を挙げての更なる大混乱に陥った事は言うまでもないことである・・・。

第六話 魔物退治にて（後書き）

第六話投稿しました。

今回はエルの処遇に関するお話がメインとなります

ご感想・ご意見・批評など・・・お待ちしております。

第七話 エルの厄日

無事に獣人ワーウルフとミノタウロスを合計25体倒した魔術士隊であつたが重傷隊員（治療済）が意識を取り戻すまで出発できずにいた……。

一方その頃、城で獣人を討伐した事とエルが賢者であつた事を報告された女王様はというと……

「エル殿が賢者様だつたというのは本当ですか!？」

「はい女王様。魔術士隊長エル殿は強力な魔法の一撃で獣人の9割方を一瞬で討伐し、倒しきれなかつた獣人の攻撃を受け重傷となつた瀕死状態の隊員を回復魔法で治療いたしました。」

「その隊員はどうしているのですか？」

「未だ平原の医療テントにて意識不明のままです。エル殿が言うには『血液不足により意識は失つたままですが命を落とす危険はない』との事です。更にエル殿より隊員が意識を取り戻すまで傍にいますので、意識を取り戻してから一緒に城へ帰還する予定だそうです。」

「わかりました。それでは帰還後のエル殿の処遇をどうするか皆で相談しましょう……。」

ところ変わつて再び平原のテントにてエルとライラの会話……

「賢者エル様、これまでの御無礼をお許しください……。」

「ライラ……. そんな真似、やめてよおお……。」

私が賢者だつたとしても私は私なんだから今までどおりエルって呼び捨てにしてよ……。」

「いえ……. エル様そうは申されましても……. 偉大な賢者様に対して恐れ多い、何なりと御命令を……。」

うん どうしようかな・・・。

このまま押し問答していても埒があかないし・・・。

!!・・・さてよ、命令か・・・。 いいこと思いついちゃったあ。

「ねえライラ、どんな命令でも聞いてくれるのよね？」

「できることであれば何なりとお申し付けください」

「ライラ、その言葉に二言はないわね!？」

「はっ・・・」

「では魔道士隊、副隊長ライラに対し賢者エルより命令します。

ライラ副隊長を含め全隊員は私が賢者である事など関係なしに今ままでおりの言動と態度で接する事を此処に命じます。」

「え・・・？」

「ほら、ライラ返答は？」

「わ、わかりました。 その命、承知いたしました。」

「これからもよろしくね。 ライラ。」

「よろしくエル。 もう・・・エルにはかなわないなあ・・・。」

こうして賢者とバレたあとでも今までどつりの関係が続けていく二人なのであった・・・。

「でもエル、城に帰還したら今の比じゃないほどの騒ぎになると思うよ・・・」

「大丈夫よ、ライラ達が私が賢者だって事を黙っていてくれてさえすれば。」

「ごめんエル・・・もう手遅れよ・・・。」

「???何が??」

「私達に同行していた伝令が一足先に城に帰還して今頃エルの処遇を、決めていると思うから・・・。」

第七話 エルの厄日（後書き）

第七話、終了しました。

エルの苦難は次回で終了となります

ご意見・ご感想・批評・・・お気軽にどうぞ。
お待ちしております。

最終話 宮廷魔術師

平原のテントでのライラの会話から2日後、隊員が目覚めたため城に帰還した。

実質1週間近くの遠征後、城に帰還すると早速女王様よりお呼びがかかった。

「賢者様、伝令に全て聞き及んでおります」

「あの・・・女王様・・・？」

私は賢者だとバレたから呼ばれたのは分かるけど・・・何故ライラも一緒に？

そう考えていると女王様がライラに話しかけた。

「魔術士隊副隊長ライラ！ 再び、魔術士隊隊長を命じます。」

『あれ？ 私が今の魔術士隊隊長なのに私はどうなるの？』と考えていると・・・

「そして賢者様、貴女様には宮廷魔術士として私の傍に仕えてもらえませんか？」

「えっと・・・わ・私が宮廷魔術士にですかああ・・・!？」

「賢者様は隊長はおるか、討伐任務に出すわけには参りません。」

このことはライラを除く7人の各隊隊長と大臣、私の話し合いのも
と決定されました。」

拒否権はないのかと思いつながら隣にいるライラを見ると『しょうがないよ賢者だもん』と小声で話しかけられた・・・。

まいったなあ・・・でも！

「私でそのような大役を勤まるかどうかは分かりませんが精一杯頑

張らせていただきます。」

「よろしくお願いいたします賢者様・・・それでは早速3日後にこの玉座の間にて戴冠式を行います」

「おおごとすごく大事になってきたな・・・

少し前まで、ごく普通の高校生だったのに・・・ゲームの中で賢者になって・・・ラスボスを倒したらこの世界に飛ばされて(落とされて?)・・・魔術士隊長になり・・・今度は宮廷魔術士・・・

「あ、あと賢者様。」

城の一室にお部屋を用意しましたので其方にお住みください」

そして迎えた戴冠式の日・・・。

会場を見回してみると隊長の制服を着込んだライラを含む8人の隊長たちの中に何故か初日に紅茶を淹れてくれたメイドさんの姿が・・・何故ここに???

「それでは最後に宮廷魔術士エル様と各隊長の顔合わせを開始いたします」

まずは一人目やけに小柄な男性が前に出てきた。

「近衛騎士第一部隊 弓隊長スミス」アンデバランです。」

見た目の年齢は20代なかば・・・かな?

二人目、シグマに顔立ちが似ている男性が前に・・・

「近衛騎士第二部隊 剣士隊長オメガ」ライオネルです。」

ライオネルってことは兄弟かな・・・?

三人目、あのメイドさんが前に出てきた・・・思いつきり違和感を感じさせる

「近衛騎士第三部隊 隠密部隊隊長ラウル」クラウディアです。」
メイドさんも隊長だったんだ……

四人目、よく知っている顔が……

「近衛騎士第四部隊 魔術士部隊隊長ライラ」マクスフィールドです。」
ライラ、これからもよろしく……

五人目、前に一回だけ話しかけられた

「近衛騎士第五部隊 竜騎士部隊隊長ケイン」シュナイゼルです。」
目が合うとウインクしてきた……

六人目、凄く恥ずかしがり屋の女性

「近衛騎士第りよく……第六部隊 騎馬部隊隊長ガリア」マスタネ
イスです……。」

緊張してるのかな？ 噛んでるし……赤面顔もかわいい。

七人目、凄く背の高い男性が……

「近衛騎士第七部隊 槍騎士部隊長ノイエル」アケオロスです。」
人付き合いが下手なのかな？ 目を合わそうとしない……

八人目、私を城に連れてきてくれた……

「近衛騎士第八部隊 重騎士部隊長シグマ」ライオネルです。」
小声で『オメガは弟』と教えてくれた。

「これにて宮廷魔術士エル様と8人の隊長たちの顔合わせを終了し
戴冠式を終「待つて!!」……エル様？」

「この場をお借りして皆様方にお願いがあります。

私は宮廷魔術士という立場を女王様より戴きましたが私がエルで
あることには変わりません……。

公式の場では仕方ありませんが廊下や訓練所で会った場合は敬語

などは使わないで気軽にエルと呼んで下さい。」

暫く会場が静まりかえったが皆が顔を見合わせ一斉に……

「……………わかりました」「……………」と……

こうして数日前までただの高校生であった彼（彼女？）は宮廷魔術師となり国を見守っていくのであった……。

最終話 宮廷魔術師（後書き）

この話で【なりゆき】無理やり？（賢者【を終了します

本当は第五話くらいで完結させようかと思ったんですが思いのほか好評だったようで。

また小説を投稿するかもしれませんがまたよろしくお願いいたします。

2009・12・28 T|Y

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1386j/>

なりゆき（無理やり？）賢者

2010年10月10日12時34分発行